

原発事故に対するいわき市民の意識構造 (3)

——自由記述の分析からみえてくるもの——

いわき明星大学 菅野昌史

1. 目的

東日本大震災及び福島第一原発事故から三年が経過した現在に至るも、事故収束への目処は未だにたっており、避難は長期化の様相を呈している。また、復興に向けた政策的対応もなかなか進まないなか、原発避難者と受け入れ住民との軋轢がさまざまな地域で問題化しつつある。

本報告の目的は、福島第一原発事故を契機に避難してきた人々に対して、受け入れ側であるいわき市民がどのような意識を有しているかを明らかにすることである。このことを、質問紙調査によって得られたデータを用いて明らかにする。

2. 方法

本調査は2014年1月、いわき市平地区、小名浜地区を対象に実施した。選挙人名簿から各地区750名のいわき市民を抽出し(20~79歳)、合計1,500名の方に郵送で調査票を配布した(督促状の送付を1回実施)。その結果、681名の方より調査票を回収(うち、無効票3)、有効回収率は45.6%であった。

調査項目としては、復興の程度に関する評価、原発事故に対する個人レベルの意識・対応、原発避難者に対する意識、などを尋ねた。

本報告では、主として、上記調査に含まれる設問「震災後のいわき市における生活において困っていること、不満に思っていることがあればお書きください」への回答である自由記述を分析し、回答者が性別や年代ごとに、避難してきた人々と、どのように関わろうとしているのかを明らかにしてみたい。

3. 結果

上記設問には回答者全体の54.7%(369名)が回答している。性別で見ると、男性50.7%(137名)、女性57.3%(232名)で、女性の回答割合が高い。また、年代別では、若い世代ほど回答割合が高くなっている。具体的には、20歳代では、男性64.3%(9名)、女性87.5%(21名)が回答しているのに対し、70歳代以上では、男性47.4%(27名)、女性45.1%(41名)であった。

次に自由記述の文を解析し(テキストマイニングのフリーソフトウェアTMMを使用)、よく用いられている語を抽出した。名詞の出現頻度の上位5位で見ると、男性では、「避難者(26)」、「人(26)」、「病院(24)」、「いわき市(23)」、「道路(20)」で、女性では、「人(68)」、「生活(45)」、「避難者(41)」、「病院(39)」、「いわき市(33)」であった。男女とも頻出語はほぼ共通であるが、男性では「道路」が5番目に、また、女性では「生活」が1番目に入っていることから、それぞれの回答者の置かれている社会的なあり方の違いが、不満や困っていることに反映していることがうかがえる。

さらに、名詞×名詞のクロス集計をみると、「避難者」と「いわき市民」は互いに、同一の自由記述の中で同時に出現している件数がもっとも多い名詞であることが明らかになった。

4. 考察

本調査では、回答者が「避難者／いわき市民」というカテゴリーを用いて、自らの置かれた社会的状況を反映した、不満や困っていることを記述していることが明らかとなった。しかし他方、第二報告で指摘されるように、回答者の71.8%は「いわき市民は原発避難者の気持ちを理解することが必要だ」と考えており、そこでも同様に「いわき市民／避難者」というカテゴリーが用いられている。

では、自由記述において回答者は、どのようにしてその記述の妥当性を産みだしているのか。当日の報告では、具体的なデータを通じて、その記述の方法を示したいと思う。